板橋ビューネ2014　劇評募集
担当：横田

「挑戦的挑発的な、あなたの劇評=抵抗を求めています。」

板橋ビューネ2014では、当演劇祭で上演される劇評を執筆していただける方を募集いたします。

【募集にあたって】
2013年から引き続き、私が担当者となって「板橋ビューネ劇評企画」を開催します。なぜ劇評家でもない私が「劇評」を求めているのか。その旨を少し書くことにします。
私が目論んでいることは、劇評が「芝居を見た後の感想・評価」としてではなく、「これから見たいと思っている芝居」として書かれることです。簡潔にいえば美的・政治的な要求をする文章ないし要求そのもののを纏める場所を構築しようということです。
私は劇評を「上演を宣伝する言説」であるとか「演劇の素晴らしさを伝えるメディア」であるとは思っていません。劇評それ自体が「作品」であること、つまり言葉を通じて想像力を開いていくようなテキスト。そういうものであると考えています。
これについては、恐らくは二つの「勇気のある決断」をしなくてはならないと思っています。一つ目の「勇気ある決断」：停滞しているとさんざん嘆かれている演劇ないし「小劇場」という利害関係圏（いわゆる“演劇界”）を放棄するところから始めなければならないということです。既に一部ではそういった破壊・再生は行われていると思いますが、改めて私たちの演劇祭もそうした運動に参加しようと、少なくとも私は考えています。
二つ目の「勇気ある決断」：（表現の）言説を取り巻く環境は日に日に厳しくなっていく中、「抵抗」の方法は複雑化せざるを得ないということです。例えば、PC的に「間違った」発言を執拗に攻撃し、またそうした「批判」に対して過敏に反応する地域行政ないし民間企業の「体質」は、公共空間上に「タブー」ないし「話題にしづらいテーマ」を満たすことになります。対照的に、政治家が謝罪さえすれば許される（つまり、利害関係を多様に持っている）のは、言論空間上で（特権的に）批判を免れることが出来ることになります。つまりこれは、言論の特権化であり、「タブー」を所有する階層とそれを所有できない階級差を生み出している、言葉の所有を許してしまっているということです。さらに深刻なことに、インターネット・メディア空間上で簡単に個人が個人を「晒し上げ」それを政治家やメディアが「煽る」ことで“思想犯”を社会的に抹殺するという様式がほとんど完成してしまったということ。この言論空間に「抵抗」すること。それは簡単なことではないでしょう。
「抵抗」の方法は従って益々孤独にならざるを得ないでしょう。具体的に言えば、例えば菅孝行や佐伯隆幸のような「毒舌」の劇評を書くことで「抵抗」することは、いまや現代の言論空間ではほとんど出来ないでしょう。また内野儀のように「日本の小劇場は見る気もしない」と観劇を放棄することさえも、それは「抵抗」とは言えない事態にすら陥ってしまっているのではないかと私は危惧しているのです（もしそれが「抵抗」の手段として可能であれば幸いですが）。当たり前のようですが、知的な手続きが「抵抗」の手段として改めて必要なのではないかと問題を提起したいと思っています。
演劇は幸いにして（！）、現代にあって比較的に言論統制を免れている表現です。それは単純に社会的な影響力が小さいとか、行政へコミットメントする機会が少ないということかもしれませんが、同時に戦後からの演劇人が長らく「抵抗」を続けてきたことの証左でしょうし、また演劇が「抵抗」のための空間として機能しうるということでもあります。演劇に「可能性」があるとすれば、それは「世界」ないし世間への「抵抗」の手段つまり思考するという手段が、まだ演劇には残されているということでしょう。
私のこの絶望的かつささやかな冒険をするために必要なことは「勇気」と「決断」です。その意味で「挑戦的挑発的」な劇評を私は求めます。それは「劇評」としての体裁を保っていなくても良いとさえ思っています。重要なことは要求することであり、あなたの要求によって新しい演劇が生まれる可能性を作り出すということです。ですから、「正しい」劇評を求めるところではありませんし、恐らく多くの人が躊躇しているように「芝居に通じている」必要もありません。たとえ観劇経験が数える程度しかなくても、積極的に応募いただきたいと思っています。むしろ、リーダーシップのある文章を書ける方を望んでいます。
こうした活動がいつまで続けられるか私には定かではありませんが（つまり今このタイミングで「抵抗」という言葉を使うことが果たして本当に可能かということですが）、幸いにして今年度も続けることが出来ましたので、皆さまからの熱いメッセージをお待ちしております。

横田宇雄

【募集要項・条件】
・「板橋ビューネ2014」に出展する上演作品に関する劇評。
・執筆いただいた劇評は編集作業を通じた上で、「別冊・サブテレニアン」に印刷し、また「板橋ビューネ2014」公式サイトへ掲載いたします。
・ただし、編集サイドで掲載が認められないと判断された場合は劇評の掲載を拒否する場合がございます（「評価」を参考）。
・募集締め切り：10月27日まで
・応募先：××××
・応募いただいた劇評の著作権は2015年9月まで「板橋ビューネ」に帰属します。また、投稿料はありません。

・観劇はご自身で行ってください。また取材が必要な場合は演劇祭を通じて各劇団へコンタクトするか、劇評企画の旨を伝えて個人で直接連絡をお取りください。

【評価】
・現代社会ないし現代演劇に対して独自の問題意識・問題設定を持っているか。
・上演内容の描写だけでなく、上演によって喚起された思考に関する記述があるか。
・上演を見ていない読者に対しても劇評内容を理解させるだけの説明がなされているか。

【コンタクト】
・××××
・担当：横田宇雄

【投稿規約】
・2,000字以上10,000字以内（注釈含む）。
・文献やパンフレットなどテキストからの引用がある場合には出典を明らかにすること。
・上演の台詞を引用する場合には「筆者メモ」の旨を明記すること。上演台本から引用している場合には、その旨を記載すること。
・観劇した作品の日時を明記すること。
・劇評の執筆については、基本的にwordかOpenOfficeWriterで行い、それ以外の場合には左記ソフトで閲覧が可能な状態で提出すること（手書き不可）。
・「別冊サブテレニアン」への公開については紙面の都合上、全文が掲載されるわけではありません。

【作業工程】
・応募者の締め切り（10月27日）。
・執筆締め切り（12月末日）。
・編集作業（2015年1月）。
・印刷およびウェブサイトへ公開。

2013年度の水牛健太郎さんと私の劇評が公式サイトからご覧いただけるようになっています。
公式サイト：http://itabashi-buhne.jimdo.com/